

おわりに

「ヨーロッパ世界の誕生」

EUの歩みを知る二一世紀の現在、本書をここまで読み進めてくださった読者の方々は、そもそもヨーロッパ世界は一体のなかにあったのだな、との感慨をもたれたのではないだろうか。

再び統合されつつあるヨーロッパ。その範囲は広い。

ヨーロッパといえば、イギリス、フランス、ドイツ、と三つの国を挙げる人は多い。これにイタリアを加え、ある人はスペインを含めたいと思うことだろう。

私であれば、すでに第3章で述べたように、東欧、ギリシア、トルコ、またキプロスなども当然ながらキリスト教世界としての基層を共有する「ヨーロッパ」だ、としたいところである。

観察者の視点の取り方で変わるヨーロッパ世界の広がり。しかし、第4章、第5章で論じた、近代世界を生んだヨーロッパに限定してまずは考えるのが穏当、というもののなのだろう。

そこで生まれた近代的思考とその後の展開こそが、本書の叙述などを可能にしているのだから。

その点で、アンリ・ピレンヌの没後に出版された書物『ヨーロッパ世界の誕生—マホメツとシャルルマーニュ』は、改めて注目されてよいと感じている。

この書物は当時、ヨーロッパ史にとって新しい地平を拓き、今日の現実に展開するヨーロッパ世界へと道を開いた作品となったからである。

「ヨーロッパ世界の誕生」論は、西北ヨーロッパ地域が政治的にビザンツの影響下から脱しひとつのまとまりのある政治体（カールによるフランク帝国）として自立したと説くばかりではなかった。

社会経済面でもひとつの完結した空間となった点をも指摘していた。

すなわち、九世紀前半までは、西北ヨーロッパも地中海世界の広域経済ネットワークの一環として包摂されていた。

ところがこの時期に、同地域が地中海世界から切り離されて、独自の自律的な経済社会を形成していったという。

古来、地中海世界はひとつの大きな経済ネットワークを形成していたことは、事実として了解されてよい。

例えば、G・チャレンコの発掘調査からは、二世紀以来、シリア山岳地帯に広がるオリーブ・プランテーションは地中海交易によって広く販路を得て、活況を呈していたことが知られる。

当時、キリスト教会の灯明はオリーブ油からとっていた。

ところが、アルプス以北の聖堂管理者が残した記録によれば、あるときからオリーブ油を調達できずに、ロシアへつながる北の交易路に活路を見だし、蜜を灯明の

燃料とするようになったという。ピレンヌは、この史料証言から、シリア産オリーブ油がガリア地方に途絶した可能性を指摘していた。近年の考古学的所見では、マッシリア（マルセイユ）沖の海底からは、シリア産オリーブ油を詰めて難破した容器が発見されるが、興味深いことに九世紀半ば以降のものについて、その痕跡が少ないといい、ピレンヌの仮説を支えている。

第1章の図7に見られるように、北アフリカに進出したアラブ・イスラーム勢力は、八三一年にシチリア島の都市パレルモを占領した。

これ以降、彼らは南イタリア各地を攻撃し、古来ビザンツ領だった諸都市を占領していった。

ビザンツ側の軍事拠点であったバーリすら、八四一年から八七一年の三〇年間にわたって占拠されたのだった。この政治地図の変更は、広域的な地中海交易を阻害したと考えられる。地中海規模大の経済ネットワークにも大きく影響したのだった。

ピレンヌの説く「ヨーロッパ世界の誕生」は、アルプス以北の人びとが、環地中海の交易世界から離れて、独自の生活圏を営みはじめた、との認識を含んでいた。

アラブ・イスラーム国家の数は、ビザンツ世界、とりわけオリーブの一大産地だったシリア地域と、マッシリア（マルセイユ）などガリア諸地域との交易路の衰退をもたらした、という。

この議論に対してはその後多くの反論が生まれ、前述の通り「局地的市場圏」の健在が確認されもした。

また「東西地中海交易の衰退」という事実認識そのものも新しい研究によるチャレンジを受けてはいるが、ガリア地域における東地中海地方から産出された物品の途絶、という論点を否定するまでには至っていない。

ともあれ、地中海から遠く離れたガリア中北部の経済生活は、九世紀に変質し、以後三〇〇年間にわたって自己完結的な農業社会に転成し、封建制の名で知られる社会関係を形成したと考えてよいのである。

グローバルなヨーロッパ史

西北ヨーロッパ地域が地中海世界の経済ネットワークから脱落して独自の「封建社会」を生み、やがて地中海世界と再び出会って「空間革命」を経験したことで、外部社会とのネットワークを糧に経済社会を切り拓く人間類型を生んだ、という認識は、ヨーロッパ史研究に小さからぬインパクトを与えることとなった。

西北ヨーロッパが域内の歴史だけでは語れない外部性をもったという事態は、その拡張版としての大航海時代を招来する前提でもあった。

そして、大航海時代以降になると、ヨーロッパはより広い外部世界との関係性のなかで歴史を紡ぐこととなった。

この歴史事実認識はいまや常識に属していると思うが、この視座からの考察は、ヨーロッパ史研究の歴史のなかでは比較的に新しい出来事だったといわなければならない。

この研究視座は、二人の偉大な歴史家によって切り拓かれた。

フランスの歴史家フェルナン・ブローデル(一九〇二—一九八五年)は、第二次世界大戦中にドイツ軍の捕虜となるなかで、戦後に刊行される大著『地中海』(原題「フェリペ二世時代の地中海と地中海時代」一九四九年)を構想した。それは、ピレンヌが第一次大戦下でやはりドイツ軍の捕虜となっている間に『ヨーロッパ世界の誕生』を着想したのと状況が似ていた。狭義なナショナリズムの相剋を目の当たりにして、ブローデルもまた広いヨーロッパ、しかもイスラーム世界との交渉をも包含した地中海世界の全体構造分析を着想したのだった。

ブローデルは、分析枠組みとして、地中海世界の歴史に流れる時間の三層構造を提唱する。

動かない時間としての「環境」*milieu*、中期的波動を創り出す時間としての「構造」*structure*

短期的時間のうごめきである「事件」*evenement* である。

そして、従来の歴史学は、偉人や出来事に焦点を合わせた「事件史」であったと整理し、一連の出来事、構造の舞台となった「環境」を叙述した上で、自らは「構造」を中心に、社会構造、経済構造、経済の長期波動(景気の循環論)などを分析してみせた。

この視座は、もとよりナショナル・ヒストリー(各国史)の枠を越えていたばかりか、地域間(地中海の各地域間)の交流がそれぞれの地域(特に西北ヨーロッパ)に与えた影響を検討するなど、新しい歴史学の幕開けとなって大きな影響を与えた。ブローデルは、やがて「物質文明・経済・資本主義|一五—一八世紀」(一九七九年)を刊行するが、これは「事実」に関する仔細な叙述をしてはいるものの、「資本主義」なる構造を長期波動の文脈で見通し、分析しようとしたものであった。

なお、最後の大作「フランスの歴史」は未完に終わったが、この大作もまた、伝統的な認識枠組みである「フランス史」を彼自身の視座から見直そうとしている。※&とピレンヌ、ブローデルの提案したヨーロッパ史へのまなざしを継承しながら、ヨーロッパをより広い外部性、すなわちグローバルな歴史のなかに捉え直すことを実践したのは、イマニュエル・ウォーラーステイン(一九三〇—二〇一九年)だった。

よく知られるように、彼はアフリカ学者であった。西北ヨーロッパ各国に従属して独自の経済発展を阻害されていた地域へのまなざしは、ヨーロッパとそれ以外との相関関係の歴史へと向かっていく。彼は、「近代世界システム」第一巻(一九七四年)の冒頭で、資本主義的世界経済の歴史を次の四つの時代区分によって示している。

- ①一四五〇～一六四〇年、
- ②一六四〇～一八一五年、
- ③一八一五～一九一七年、
- ④一九一七年 1 現代。

経済史的観点からも、一般的なヨーロッパ史の観点からも、この時代区分の提案はきわめて妥当なものに思えるのであるが、この世界史観のなかでウォーラスティンは、「中核」core としてのヨーロッパ国家が、「周辺」periphery としてのアフリカ、アジア諸地域との関係性のなかで発展した、と提唱して、新しに分析枠組みを提示した。

催かに、イギリス(大英帝国)では、上記第三段階(一九一〇世紀)において、「中核」

core としての本国の資本主義的経済発展が見られることとなる。

それは、前段階までに「周辺」地域が植民地化され、原材料の供給地、製品の市場として機能したためだった、というわけである。

原材料 Material の確保、労働力 Ma の増強、製品販路 Market の拡張。経済(工業的生産と貿易)活動の拡大を可能とする資本 Money の出現。

それらが全体として、資本主義的な生産活動の拡張を可能とする。

イギリス社会では工場の設置に伴う都市化が進み、労働者大衆が生まれ、農村地帯からの人口移動が常態化していった。

国内労働力の慢性的な供給不足状態は、賃金の上昇と直結していたのであり、この傾向は実質賃金の上昇を意味し、代替措置としての生産用の機械 Machine の出現を促したのだった。

拡大していった国民経済活動は、一九世紀以降のヨーロッパ史を彩る事態となっていた。

「遅れてきた資本主義国」ドイツや日本もまた、国家主導とはいえ、この循環を志向していった。

いまや国家と社会の意思決定主体となった「市民」(商工民)による政策運営は、国民経済の拡張をめざして対外進出するようになる。

世界大戦はこうして招来されたと理解するのが、歴史の現実に近いのだろう。

世界の不均等発展という大きな別の問題を本書で扱うことはできないが、ウォーラスティンは、一九世紀以降の西北ヨーロッパ各国史を、一五世紀半ば以来のロングスパンで、かつグローバル化に振れたヨーロッパ史の展開のなかで見事に捉え、精緻に理論化し、分析した。彼が残した業績は、これからも私たちにさまざまな問題を提起してくれることだろう。

私たちにとってのヨーロッパ史とは

きて、私たち日本人は「ヨーロッパ史」に何を求めてきたのだろう。

少なくともいえることは、私たちは明治期以来、政治や経済の現実的な「近代化」を推し進めることと並行して、ヨーロッパを「近代社会」の模範と見て、経済活動や社会そのもの、つまり人間関係の近代化をめざしてきた、ということではないだろうか。

経済に関していえば、農業生産の体制のもとに集約され、土地や在地の人間関係にとらわれていた農民層の解放（あるいは地主制の解体）こそが、近代工業化を進展させるための必須条件だったから、自由な労働者の創出はいかにして行われうるのか、ヨーロッパ各国の近代化過程がそのモデルとなる、と想定され、分析されてきたのである。

このことから、工業化が先行し、世界経済の中核ともなった「イギリス」が一番の手本とされてよかった。資本主義化の手本ということでいえば、次いで「フランス」だろうか。

しかし、明治期の人びとは、フロントランナーとしての英仏ではなく、遅れて資本主義化した「ドイツ」にこそ見るべき模範を見いだした。

ドイツの名を冠した国家は、すでに指摘したように一八七一年になって初めて登場する。明治維新は、西暦では一八六八年のことであった。

この二つの「遅れてきた資本主義国」は、歴史的に見て同じような事情を抱えていた。かの地の領邦国家体制と、日本の幕藩体制は、諸国分立の点で確かに似通っていた。

イギリス型の立憲政治を導入し、政党内閣を組織させる、と提言した大隈重層（一八三八～一九二三年）や福澤諭吉（一八三五～一九〇一年）の思想が鮮明に出てきたとき、それは過激である、と明治政府内では違和感をもつ者が少なからずいた。

伊藤博文（一八四一～一九〇九年）もこれに反対した。

伊藤をはじめとする人びとは、ドイツ事情を知るに及んで、プロイセン型の憲法草案に傾いていったわけである。

一八八一年に起こったいわゆる「明治一四年の政変」は、大日本帝国をドイツ流の立憲君主国家にするための選択となった。

「イギリス」を手本とすべきと主張した大隈重信や福澤諭吉の門下生らが、この政変によって下野したことはよく知られている。

こうして一九九〇年代になると、ベルリン大学を中心に多くの国費留学生がドイツに派遣されることとなる。医学生として北里柴三郎（医学者、一八五三～一九三一年）、山根正次（医学者、一九五八～一九二五年）、森鷗外（一八六二～一九二二年）、法学徒として宮崎道三郎（法制史家、一八五五～一九二八年）、穂積八東（法学者、一八六〇～一九一二年）等、錚々たる各分野の俊才が、ドイツの学知を修め、ドイツ帝国の先端医学や国家制度の導入のために研学に励んだ。

さらに一世代後になると、西洋列強との経済競争のために必要となった商学・経済学分野でも人材育成の機運が品まり、高等商業学校（現一橋大学）の福田徳三（一八

七四～一九三〇年)、関一(一八八七～一九三五年)、三浦新七(一八七七～一九四七年)、左右田喜一郎(一八八一～一九二七年)らの復才が派遣されて、経済学(ドイツ歴史学派経済学)、哲学などを修めている。いずれも、近代日本の国家と社会の骨格がかたち作られる途上での出来事であった。

ヨーロッパ史からの学び

一九世紀に国民国家としての経済発展を推進したヨーロッパの市民(商工民)社会は、経済面での内的発展(生産性の向上)と、外延的発展(植民地獲得競争)に邁進していった。

帝国主義の時代、と語られる一八七〇年代からの時代は、国家間の領土拡大を含む経済競争を主な政策目標としていたのではなかったか。

資本と市民(労働者)が一体となって推し進めた諸政策は、二度の世界大戦までも引き起こした。

アンリ・ピレンヌが提唱した「ヨーロッパ史」は、かかる一九世紀型の各国政治・経済発展政策への、いわばアンチテーゼにほかならなかった。

ピレンヌや増田四郎は、ヨーロッパ世界が本来有した一体性を指摘した。そしてこの一体性が、アラブ・イスラーム勢力の伸張によって瓦解した、と説いていた。この認識は、七世紀から一〇世紀の地中海＝ヨーロッパ史の研究成果に照らしても、論調の強弱はあるとはいえ、歴史上の事実としてよい。

そう考えると、かつての大帝たちの活動は、地域限定的となったヨーロッパ世界を地中海規模大に復しようとする努力にほかならなかったといつてよいのではないだろうか。

他方、二〇世紀から二一世紀の現在、世界規模での新たな移民・難民現象によってヨーロッパは流動化している。

古代末期におけるキリスト教のような新たな統合の原理を見いだせないまま、世界は苦悩している。

各地で見られる保守勢力の台頭に対する憂慮もまた、古代末期から中世初期に出現した知識人らの経験・対応と重なって見えてくる。

現在のヨーロッパ学界において、古代末期から中世初期のヨーロッパ史への関心が改めてまっているのも頷けるというものである。

ヨーロッパが、言語や国民性の違いを乗り越え、経済統合をしてすでに三〇年が過ぎた。

現代ヨーロッパの動向が歴史学や政治学、法学、経済学に与える影響については、論を俟たない。

歴史学に限定して考えても、二〇世紀後半以降に進展したこの歴史の新局面が、「ヨーロッパ史」研究に与える影響は、これからヨーロッパばかりでなく各国の歴史学界においてさまざまな反応と研究成果を生むにちがいない。

国民国家を創りあげた時代の人びともそうだったが、本来のヨーロッパ世界の広がりをも的確に認識して知的活動の枠組みを切り拓いた人たちも、また歴史が産み落とした存在といえるのかもしれない。

ヨーロッパの文化活動には、そうした時代ごとの社会や経済の状況に応じた変化の相貌を、表層ばかりでなく深層にまで分け入って的確に認識し、時代に潜む矛盾をも見事に言語化しながら、未来を切り拓く力がある。そのような思考者たち(哲学者や歴史家、文学者、作家、芸術家、等々)を生んできたのが、ヨーロッパの歴史だったとあってよいのだろう。

他方、一世紀から一二世紀に始まる中世都市で育まれた市民意識と、都市の団体的ルールもまた、ヨーロッパの歴史が生んだ精華というべきだろう。都市の自治、都市空間内での市民の自由 *Libertas*、そして市民相互における平等 *Egalitas*・博愛 *Fratemitas* の精神こそは、近代における「公共精神」の基礎となった。これは、その頃から強化される新しい領主権力に対応した自警・自衛の動きであったが、そこに打ち立てられた都市自治の精神は、きわめて民主主義的なかたちで市民社会のルールを創っていった。

そこには、高める者も貧しい者もいた。

しかし、公共世界に奉仕するという精神、公共の施設を大事にするという精神は、旅路な現施を伴って現代ヨーロッパに継承されているのである。

このヨーロッパ市民生活の精神こそは、普遍的な価値をもって二一世紀の今日、世界の文化の基礎となっているものであろう。

あとがき

この小著は、すこし風変わりなヨーロッパ史論です。歴史の概説書であれば、事実を系統立てて時系列に沿って叙述するのが普通かもしれませんが。研究書であれば、史料やそこに痕跡をのこす諸事象を、事象相互間の因果関係を解きほぐしながら解説したりすることでしょう。

またヨーロッパ論であれば、ヨーロッパ文化の本質を論じ、それぞれの時代を代表する著述に即して思想の特質を抉り出したりするものです。

ところが本書では、一部でそのような試みをしてはいますが、全体として「ヨーロッパ史とは何か」という問題にささやかな見通しを得ようとして、それらの常道を踏んでいません。

いわば、私たちが「ヨーロッパ」の歴史をどう見てきたかについて考え、「ヨーロッパ史」をめぐる思想の変遷を整理してみる作業となりました。

専門領域を超えて、なぜそのようなかたちで無謀とも思える一書をなそうとしたかといえば、私が関心を寄せた対象フィールド「ビザンツ」なる国家をどう捉えるか、という問題が、研究作業そのものよりも前に、研究の戸口に大きく横たわっていたからです。

経済学部で「経済発展のメカニズム」や「資本主義社会の構造」などについて学びながら、その舞台となったヨーロッパ社会そのものに惹かれ、しかし近代ヨーロッパとは一見無関係な過去社会に惹かれて研究を始めました。

そのビザンツ国家にも独自の社会経済構造があり、人びとの暮らしが営まれていることを知り、ますます興味を深めていったものです(まさにアウグスティヌスがいう「学べば好きになる」*amare noscentis est* でした)。

にもかかわらず、この社会に対しては当時、停滞した社会、衰退する帝国、分解しゆく国家、等々、いささか無慈悲な評価が与えられていたものでした。

今から思えば、この社会に対するネガティブな評価は、当時(一九八〇年代まで)の時代精神によるものだった、と思い知ります。日本にかぎらず、一九世紀半ばより始まる近代的な経済発展という国家の要請のなかで、いわば右肩上がり発展し、成長しなければならない社会の住人であった私たちが、ヨーロッパの中世社会のなかで「古代の延長物」として扱われて評価が難しかった東地中海社会に対し、その住人との対話もあまりないままに貼ってきたレッテルだった、と了解されてきます。

直感的な違和感を多少とも言語化できるようになった今、舌足らずなレポートを提出している感があります。

真実と虚肉は、ことばの属性であって、ものごとの属性ではない。そして、ことばがないところには、真実も虚橋もない。

ホップズは『リヴァイアサン』のなかでこう書いていました。私たちは、知識として与えられるものによって常識をつちかい、しばしば行動を規定されもします。

しかし、必ずしも真実とはいえない知識もまた少なくありません。あるいは作為によって与えられた知識の上に生きることすらあるかもしれない。

自らの目で対象に迫り、歴史認識をも含めた社会の真相に迫りたい。

そして、ゆるぎない事実を認識しながら思索したいもの、とささやかな歩みのなかで思うこの頃です。

ひとは時代のなかに生きています。そして各々の土地の作法のなかで暮らしています。

あるとき、ある場所に生まれ落ちた私たちにとって、自らが立つ基盤を理解することは大切な作業に違いありません。

その際、自らが生きる時代と場所の論理をより深く認識するために、他の時代、他所の作法を知ることが有効な契機となることが多いでしょう。

同時代の旅でもその効果は得られるものですが、過去のさまざまな社会に旅することから学べることも少なくなく、知らない土地であればなお、虚心坦懐に事態を見極める眼も養われるというものです。

第4章でも述べたように、「中世人」の世界観を乗り越え、自らの眼と経験によって真実を見極めようとする方法態度は、一六世紀以降の「近代人」によって生み出されました。それは最初、暦に関する探究からでした。

コペルニクスもこの暦の問題から天文の世界に向かっていったのです。

当時の人びとに「世界暦」問題（終末を迎えていない「いま」を見極める関心）が伏在していたことは、明らかでした。

やがて、一七世紀の人びとは、それぞれの探究の道を切り拓いていき、科学的方法態度が生長していったのでした。

他方、個と個の触れ合いのなかから生まれる相互認証は、私たち近代人の基礎にある生活哲学といってよいでしょう。共同体や国家に属して一体感を共有してもいる私たちですが、それぞれにかけがえのない一回かぎりの個として存在している。

その淵源となる個の思想は、思えばエーゲ海の泡立つ白い波濤から生まれ出たものでした。近世哲学から学問生活を始められた坂口ふみ先生もまた、近世思想の源流を求めて古代末期へと想いを馳せておられました。

純粋な個としての個、かけがえのない、一回かぎりの個の尊厳、そういったものが思想的・概念的に確立したのは、近代よりはるか以前のことだったと思われる。遅くとも紀元五、六世紀の、あのローマ帝国末期の教義論争のなかで、それははっきりとした独自の顔をあらわし出している。……あのローマの教義論争の時代には、近代の個よりは少し花漠とした、しかし、まだ「意識」に還元されきってはいない、それゆえいかにもみずみずしく、生命にあふれた「個」の概念が生きてはいなかったろうか。

（「個」の誕生に岩波現代文庫）

アメリカの歴史家ピーター・ブラウンによれば、古代末期（二一七世紀）、このような「個人」意識は、満天の星の個々に擬えられて、自覚化されていったといえます。このキリスト教世界生成期に、近代の、自由で平等で、かけがえのない「個」の思想が胚胎されたのでした。

こうして私の研究は、現代に直結する（近代社会）の具体的生成分析を見据えながら、一連の装置を生み出す種子を胚胎したプロトタイプ社会の検証へと向かっていったのでした。私たちの「経済学」は、「近代市民社会」の産物である。とすれば、私が見定めたいと願っていたのは、その原型としてのオイコノミア論でした。

2023-12